

コリント人への手紙第一4章10節 「キリストのために愚かな者」

1A 愚かな者

1B 神々に命を献げる人々

2B 二つの反応

2A キリスト者の愚かさ

1B キリストご自身の愚かさ

2B 使徒たちの殉教

3B イエスに従う者たち

3A 福音のためにいのちを捨てる者

1B 損得勘定の「いのち」

2B 99匹を置くイエスの愛

3B 救う者たちが失うもの

4B 失う者たちが救うもの

本文

コリント人への手紙第一 4 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びが、3 章まで来ていました。今日は 4 章で、パウロがコリントにある教会の問題の一つ、派閥争いについての問題について述べる最後の部分になります。午後に一節ずつ見ていきますが、今朝は、10 節に注目します。「**私たちはキリストのために愚かな者ですが、あなたがたはキリストにあって賢い者です。私たちは弱いのですが、あなたがたは強いのです。あなたがたは尊ばれていますが、私たちは卑しめられています。**」コリントにあるクリスチャンたちが、自分たちが崇高な知識に到達した者であるかのように高ぶっていた。パウロは、自分を含めた使徒たちがどれほど卑しめられ、弱められていたのかを語りました。人間的な基準からは、キリストのために「**愚かな者**」と呼んでいたのです。

キリストのために愚かな人ということですが、かつて、カルバリーチャペルを通して、数多くのヒッピーと呼ばれる若者たちが回心し、イエス様を熱烈に愛するようになりました。「イエスの変わり種(Jesus Freak)」と呼ばれます。ある牧師さんは、キリストの愛を説明するために、「クレージな愛」という著書の題名を付けました。私も、日本の文化において、真っ当なキリスト信仰を持つためには、大胆にこういうべきだと思っています。「キリストのための変な日本人」です！

日本において、「変な人」というのはとても否定的な言葉です。ある自分の性格を診断するサイトで、「周りが思う変な人の特徴 14 選」というのがありました。¹中身を見てみると、それらが間違っていること、否定的なことが書いてあります。例えば、「空気が読めない」があります。そして「一風

¹ <https://koigaku.machicon.jp/judge/230674/>

変わった趣味がある」「自分の世界に浸っている」とも。「こだわりが尋常でなく強い」とか。「かたくなに頑固」そして「周りをまったく気にしない。」「単独行動を好む」「異常な執着心」「個性が強すぎる」ともあります。

けれども、よく考えてみてください。人口の1%未満とも言われる、キリスト者たちは、ただ信仰をもってそのことを表明して生きること自体が、「空気が読めない人」と言われます。「一風変わっている」と思われるでしょう。信仰なんていう空想的な世界に浸っている人ですね。何でそこまでひたむきになれるんですか？と「こだわりが尋常」ですね。そして、イエスのためならば決断を一切変えないというのは、「かたくなに頑固」です。そして、99人以上が信じていないのに、自分は信じているのですから、「周りをまったく気にしない。」「単独行動を好む」「異常な執着心」「個性が強すぎる」と見られて当然です。

だからこそ、「イエスのために、変な日本人になる」という勇気が必要です。(信仰ではないですが、変にならなければ、人の活力が失われてしまう、死んでしまうことをジョークを交えてお話しした方が、最近います。真鍋叔郎教授です。ノーベル物理学賞を取った方です。日本人は喜びますが、実は米国籍をかなり前に取得して、米国在住なんですね。アメリカ人なんです。なぜ国籍を変更したのですか？という質問に対して、「日本では人々はいつも他人を邪魔しないようお互いに気遣っています。」とのこと。それで、「私は他の人と調和的に生活することができないからです。」と言われていました。²彼がもし日本的な常識で生きていたら、その研究は潰され、死んだ魚のようになっていたに違いありません。実はキリストに対する信仰は、独特の発想以上の革新的なものですから、ましてや、常識的に生きてたら死んだも同然になってしまいます。)

1A 愚かな者

1B 神々に命を献げる人々

人々が何かのために命をかけていて、けれども、それが割に合わない、その犠牲に相応するような結果を見ることができないとき、人はその人を見て「愚か」と思います。

例えば、卑近な例では「酔っ払い」です。酔いが醒めたら、しらふでは絶対にしないことをしてしまって、自分自身も恥ずかしくなります。けれども、それでもお酒を飲みたいと思う。かつて、ギリシア神話では、酩酊の神はディオニューソスと呼ばれていましたが、ディオニューソスのために愚か者になった、といってもよいでしょう。お金もそうですね。金儲けのためなら、命の危険があっても挑戦する人がいますね。お金の神は、マモンと言いますが、マモンのために愚か者になったと言えます。それから、単に快樂のために命の危険を冒す人もいますが、快樂の神はモレクです。モレクのために愚か者になったと言えるでしょう。

² <https://globe.asahi.com/article/14456228>

2B 二つの反応

こうした人々のことは、「ああ、自分の好きなことをしているんだから、ほおっておけばよい。」としているか、「すごいよね、こんなに命をかけられるのも、大したものだ」とその勇気をほめたくなったりします。けれども、こうした神々のために愚かになるのなら、そうした反応が帰ってきますが、「キリストのために愚かな者」となったら、どうでしょうか？

ジョン・アレン・チャウさんという、2018年に、当時26歳の若者が殺されました。彼は、現代に、石器時代のように生きている「センチネル人」の福音を届けようとしていました。インド洋に浮かぶ北センチネル島に住むこの部族のことを、彼は16歳の頃から知るようになり、彼は彼らに対する愛を抱き、10年間の間、準備のためにすべてを費やしました。言語の習得だけでなく、救命士の資格を取得のために勉強をすとかして、宣教活動をする時に必要な技術を身に付けていきました。けれども、彼は島に近づいただけで殺され、その遺体を原住民の人が引きずっているのを同行した漁師が見たとのことです。³

このニュースは日本でも話題になりましたが、日本人のコメントは全く理解ができない、どうしようもなく愚かだというものです。侮蔑の思いを言い表しています。「帝国主義的で高慢なキリスト教のすることだ」として、憤っているのもありました。

けれども、ジョンさんの思いは、全く違います。「私が帰還するにしても、しなくとも、すべてが主の栄光となりますように。」「気が狂っていると思われるかもしれませんが、けれども、これらの人々にイエス様を伝えることは価値あると思います。もし私が殺されても、彼らに怒りを燃やしたり、また神に怒ることはしないでください、むしろ、どうか、あなたも神の召しに従順に生きることができるようになってください、そしてこの幕を通過する時(肉体から離れる、つまり死ぬということ)、再び会いますように。これは無益なことではないのです、センチネル族の永遠のいのちがかかっていることであり、黙示録7章9-10節にあるように、彼らが神の御座の周りで自分の言語で神を礼拝するのを見たいと、願ってやみません。」あらゆる部族が永遠のいのちをもって天において神を賛美するという幻です。この、かけがえない永遠の財産のために、自分の命を献げる覚悟をもって10年間も準備してきました。

2A キリスト者の愚かさ

1B キリストご自身の愚かさ

キリストのためになぜ、パウロたちは「**愚かな者**」なのだと言ったのかと言えば、主であられるキリストご自身が、人間の常識からすれば無謀すぎる、とんでもないことを行ったからです。まず、キリストは、ご自身が神ご自身であるにもかかわらず、神の身分に固執なさらずに人となられました。私たちが、少しでも自分に与えられている力や能力を捨てることを嫌がるのではないのでしょうか？

³ <http://www.logos-ministries.org/blog/?p=8544>

私は、宣教のために海外に住みましたが、とても基本的なこと、そう会話が成り立ちません。言語が出来ないからです。自分が馬鹿に見えましたし、相手もどうしてこんなところに外国人が来ているのか？と思ったでしょう。言語能力がちょっとでも減らされるだけでもじれったくなるのに、ましてや、全知全能の神が、有限な人になること自体が異常です。すべては、私たちを愛するため、私たちの間に住まわれるためです。

そして、イエス様はご自分のものになった者たちを愛され、とことん愛されました。「ヨハ 13:1 世にいるご自分の者たちを愛してきたイエスは、彼らを最後まで愛された。」そして、イエス様は弟子たちの足を洗われました。天地を造られた神が人の姿を取られ、しかも、人々を愛し、仕え、人の最も大きな必要、罪を取り除くために、ご自身の肉体を犠牲とされたのです。この愛こそが異常、気が狂っていること、愚かそのものです。しかし、召された者、信じた者にとってはそうではありません。神がご自分の御子を下さるほどに愛されたその愛がいかほどのものであるかを知り、いのちというものを知りました。生きる意味を知りました。この方だけが、すべてです。

2B 使徒たちの殉教

パウロは、本文、10 節で「**私たち**」と言っていますが、使徒たちのことを話しています(9 節)。最後まで愛されて、その愛を受け、それからよみがえられたイエス様に再会した彼らです。またパウロのように、その場にはいなかったけれども、後で復活のイエスに会った使徒もいます。彼らについて、「**死罪に決まった者のように、最後の出場者として引き出されました。**」と言っています。ローマの競技場で、最後に出てくる剣闘士は殺されるために出てくるようなものです。あるいは、野獣が放たれて、囚人が喰い殺されるのを観衆が見ています。

十二使徒たちは、みなが殉教しました。聖書にしるされているのは、ヤコブですが、ヘロデのよって殺されました。その他は、使徒教父と呼ばれる使徒たちの弟子だった人々が、後世に残した文献で記しています。ペテロは、十字架に逆さ磔になりました。彼自身が、「主のように十字架につけられる価値のない者だ」として、願い出たのです。ペテロの兄弟アンドリュウも十字架刑に処せられました。

イエス様を疑ったトマスは、シリアで宣教を活発に行い、インドにまで行ったとも言われています。兵士の槍で殺されました。「神を見せてください」と言ったピリポは、小アジアのヒエラポリスで、拷問を受けた後に殺されています。取税人マタイは、ペルシアとエチオピアで宣教しました。エチオピアで殺されています。バルトロマイ、あるいはナタナエルもインドまで行きました。彼は、生きたまま皮剥ぎにされて殺されたとされています。熱心党シモンは、十字架刑もしくは、のこぎりで半分に切られました。イスカリオテのユダに代わって使徒となったマツティアも、十字架刑で死にました。

そしてヨハネですが、彼は煮えたぎった油の中に投げ込まれましたが、害を受けることがなかつ

たそうです。その後パトモス島に島流しにされました。そこで黙示録の啓示を受けます。時の皇帝が死んだ後に、彼はエペソに戻り、教会の監督を続けますが、彼のみが自然死でした。

イエス様の半兄弟でエルサレムの教会監督になったヤコブは、神殿の頂から落とされました。イエス様が誘惑を悪魔から受けられて、そこから落ちなさいとそそのかされた、神殿の頂です。そこから落ちたけれども、死にませんでした。落した人々のことを、その赦しを祈っていたそうです。けれども、その彼を棍棒で殺したそうです。パウロは、時の皇帝ネロによって斬首されています。

使徒たちは、イエス様にある神の愛を知りました。この方を裏切ることなどできません。復活のイエス様を目撃しています。真実を否むことはできません。そして、何よりも、キリストにある苦しみの先にはよみがえりの希望があります。「ピリ 3:10-11 私は、キリストとその復活の力を知り、キリストの苦難にもあずかって、キリストの死と同じ状態になり、11 何とかして死者の中からの復活に達したいのです。」使徒たちの中には殺される前に、「私はこの時のために生きてきたのです。」という言葉を残しています。

3B イエスに従う者たち

これは、使徒たちの証しですが、イエスに従う者たちが、世の基準からしたら愚かにしか見えないう犠牲を払ってきました。今、私たちは日本語で聖書を手にしてはいますが、昔は聖職者と呼ばれる人たちのみが、ラテン語に訳されている聖書を読むことができていた時代、ウィリアム・ティンダルというイギリス人が、一般庶民も読むことができるように、英語に翻訳しました。彼は 1536 年 10 月 6 日、火あぶりの刑の処せられました。彼の翻訳の試みが、他の言語への翻訳も進み、今の日本語訳聖書もあるのです。

そして今現在も、信仰の証しによって苦しみを受けている兄弟姉妹は世界中に大勢います。福音的信仰を持っているキリスト者は世界で 6 億人いるとされていますが、その半数以上が、実に、信教の自由のない国に住んでいます。⁴信じるということ、礼拝を献げるということ、それが刑法で罰せられるような犠牲を伴っても、それでも信じるのです。人間的な基準では、愚かと言わずしてなんといえばよいでしょうか！

3A 福音のためにいのちを捨てる者

1B 損得勘定の「いのち」

これらから分かるのは、福音のために生きるのは、損得勘定で生きている私たちの生き方を根幹から変えるものです。イエス様は言われました、「マル 8:35 自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音のためにいのちを失う者は、それを救うのです。」ここでイエス様が言われ

⁴ <https://www.christiantoday.co.jp/articles/28785/20201123/world-evangelical-alliance-secretary-general-thomas-schirmmacher-interview.htm>

ている「いのち」とは、いわば損得勘定の生き方と言ってよいでしょう。私たちの深い部分には、「これこれをしたら、こういうことが起こるから、いま、これをやっていたら得になる。」と思ってやっています。あるいは、これをやれば損があるから、やらないと思ってやりません。例えば、イエス様を家族に話すものなら、関係に角が立つから、話さないほうが得策だ、となります。

2B 99 匹を置くイエスの愛

けれども、神ご自身が恵みを示されました。恵みとは、損得勘定が全くない神のご性質であり、姿勢です。相手がどんな存在であろうが、神がただ憐れみ深いから憐れんでくださいます。太陽の光が、その恩恵を、この人は良い人だから与えよう、悪い人だからやめとこうなんて、しませんね。同じように、神は、ご自身が憐れみ深く、愛に満ちておられるから、良くして下さるのです。だから、そこには損得が全くないのです。したがって、恵みの神を信じるということは、自分自身も損得勘定から解放されるということです。損得勘定には真実な愛はありません。条件付きだからです。

賛美でも歌いましたが、イエス様は 99 匹の羊を置いて、一匹の羊を捜す羊飼いに語られました。「ルカ 15:4 あなたがたのうちのだれかが羊を百匹持っていて、そのうちの一匹をなくしたら、その人は九十九匹を野に残して、いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩かないでしょうか。」人は損得勘定で動いています。だから、99 匹を置いて、一匹を捜しに行くことは無謀なことです。99 対 1 という計算をしているからです。けれども、人には愛が働く時に突き動かされます。自分の世話する羊がいなくなれば、その命を救うためにはどんな犠牲も払うのです。みなさんがたとい、地球上にたった一人しかいない人間だったとしても、あなたのために天地を造られた神は、ご自分の独り子のいのちをお献げになったことでしょう！

3B 救う者たちが失うもの

このような愛を知ったので、イエス様を愛する時にもこのような愛で、愛します。それでも、損得勘定で生きたらどうなるのでしょうか？「自分のいのちを救おうと思う者はそれを失う」と言われています。自分が保つていようとしているそのものを、結局は失ってしまうのです。

ジョン・アレン・チャウさんのように生きた若者ももっと前にいました。1956 年に 28 歳で、南米のワダニ族に福音を伝えようとするも、彼らに近づいてからたった五日後に、槍に突き刺されて死んだ宣教師がいます。ジム・エリオットという人です。彼は、大学で哲学を教えることのできるような人でした。その教授職を投げて、ワダニ族のために福音を伝えることを決心しました。友人は、「そんな野蛮人のところに行くなど、愚かでしかない。」と手紙に書いたそうですが、返信でジムはこう書きました。「失うことができない物のために守れない物を与える者は、決して愚かではない。」守れないもの、というのは、イエス様の言われた「いのち」のことです。損得勘定で生きることです。

人間は、自分に得があるというものを必死に守ろうとしています。けれども、結局は守れないの

です。日本の人が本当の意味信仰を持ってない理由、また持っても、いつの間にかイエス様の愛から離れていってしまう理由は、一般の人々が言っている言葉にあります。「キリスト教は、過去に戦争したからね。」キリスト教には、どうしても争いごとを引き起こすというイメージが、一般の人々にあります。それが、日本人たちには非常な恐れとなっています。先ほどの同調圧力と言ってもよいでしょう、「人付き合いを大切に、自分は生きられる」と思っているからです。仏教や神道の行事が、またその他のいろいろな行事が自分を活かしていると思っています。けれども、イエス様に従いたいと思う時に、これらのものに参加しない、つまり村八分にされると、潜在的に恐れるのです。それで、そういった近隣との関わり、家族との関わりにしがみつきます。

けれども、本当にそれを保っていることはできますか？いいえ、今、まさに日本で、檀家制度に基づく仏式の葬儀やお墓を維持できないという、檀家制度が始まった400年前以来の、最も大きな危機であるとも言われています。自分のことを、その親戚の人たち、家族の人たちが自分が、一つの儀式を守ることで、人付き合いをしていることで、本当に自分が苦しい時に守ってくれるのでしょうか？自分が、守ることのできないものを守ろうとしたところで、それを失ってしまうのです。

それと比べて、教会の兄弟姉妹はどうだと思いますか？一人一人が、苦しめば自分のように心を痛めています。良いことがあれば自分のことのように喜びます。私は牧者だからということがあるかもしれませんが、自分のほうがもっと長く生きていたら、お葬式までお付き合いしたい、そのような長い付き合いで愛したいと思っています。いや、皆さんは多かれ少なかれ抱えていることでしょう、だから、自分の都合で誰かが出ていく時に、自分のどこかが引き裂かれるような思いで心が痛むのです。

それから、一般の人から聞かれるのは、「どうやって飯を食っているの？」です。私のように、一般の仕事をしなくて、奉仕活動をしている人でも、霞を食って生きるわけにはいきません。弟子たちも、自分の仕事道具である漁の網を捨ててイエス様に従いました。ここも、損得で考えられない部分です。信仰を持つとは、フルタイムで福音の働きに従事している人だけでなく、多かれ少なかれ誰でも、「どうやって食べていくのか？どうやって、自分の心身を守って行けるのか。」という不安が付き物なのです。けれども、損得勘定を自分の生活に持ち込んでいくとどうなるのか？仕事の為と言いながら、その仕事の中で、過労やストレスで倒れてしまうかもしれません。夫また妻の為、また子供のために、と言いながら、その関係に亀裂が走ります。なぜなら、召しに従っていくことそのものが、自分自身を救う道でもあるからです。

エリヤが、イスラエルに飢饉があるとアハブ王に告げた後に、彼が鳥によって肉とパンが養われました。それと同じように、それぞれが神からの養いを受けています。法則がそこにはなく、こうやればうまくいくというのがないのです。神が一方向的に恵みをキリストにあってくださいのように、神が確かに事欠くようなことがないようにしてください、必要を満たされるということを知ります。神の

国と神の義を第一に求める時に、加えて必要が満たされるのです。

4B 失う者たちが救うもの

イエス様は、「わたしと福音のためにいのちを失う者は、それを救うのです。」と言われました。損得勘定がなく生きる時に、つまり自分が犠牲にしたことを、結局は救うことになります。自分が家族を犠牲にしたと思っていたことが、結局、家族のためになる。自分が失ったと思われる仕事のこと、結局、もっと意味のある形で取り戻せた。自分自身で守ろうとしていることは守れないが、自分が失うことで初めて、キリストが与えてくださることを経験するのです。イエス様が弟子たちに言われました、「マタ 19:29 また、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子ども、畑を捨てた者はみな、その百倍を受け、また永遠のいのちを受け継ぎます。」イエス様は、百倍という表現を使われることで、損得勘定で言いつくすことのできない、最上の幸いが与えられるのだということです。そしてその行き先は、永遠のいのちです。私たちは、このために生きているのです。